

[平成22年度参考となる技術]

[技術名] タバココナジラミバイオタイプQに有効な薬剤の選定

[要約] 本県に発生するタバココナジラミバイオタイプQ成虫の薬剤感受性について検定した結果、ニテンピラム、ジノテフラン、ピリダベン、ピメトロジンの感受性が高い。

[キーワード] トマト、タバココナジラミ、薬剤感受性

[担当] 農業試験場・生産環境部・病理昆虫研究グループ

[連絡先] 電話 0776-54-5100 電子メール s-hagihara-9f@pref.fukui.lg.jp

[背景・ねらい]

2008年に本県で初めてトマト黄化葉巻病ならびに、一部の薬剤に対して感受性の低いタバココナジラミバイオタイプQ（以下バイオタイプQ）の発生が確認され、トマト黄化葉巻病ウイルス媒介虫であるタバココナジラミの防除対策が緊急の課題となっている。また、バイオタイプQの薬剤感受性の発現状況は地域によって異なり、本県における有効な薬剤に関する情報が不足している。そこで、県内で発生しているバイオタイプQ成虫の薬剤感受性について調査し、今後の防除薬剤選定の基礎資料とする。

[技術の内容・特徴]

- 1 バイオタイプQ成虫に対してはニテンピラム、ジノテフラン、ピリダベンが最も感受性が高く、次いでスピロメシフェン、ピメトロジンの感受性が高い（表1）。
- 2 スピロメシフェンはバイオタイプQ成虫については感受性が高く、バイオタイプB成虫については感受性が低い（表1）。
- 3 エトフェンプロックスはバイオタイプB成虫については感受性が高く、バイオタイプQ成虫については感受性が低い（表1）。

[技術の活用面・留意点]

- 1 現在感受性が高い薬剤でも、連続使用すると感受性が低下するので同一系統の薬剤の連用は避ける。
バイオタイプB、バイオタイプQに感受性の高い薬剤ローテーションの例
ニテンピラム（ネオニコチノイド系）→ピリダベン（殺ダニ）→ピメトロジン（その他系統）
- 2 バイオタイプQに有効な薬剤数は限られているため、他の害虫を対象とした薬剤散布にバイオタイプQに有効な薬剤を使用する場合は、使用回数に留意する。
- 3 黄色粘着板の設置や0.4mm目合いネットの設置など薬剤のみに頼らない防除対策を取り入れる。
- 4 防除の際には福井県農作物病害虫防除指針、独立行政法人農林水産消費安全技術センターの農薬登録情報検索システムを参照し、最新の情報に従う。

[具体的データ]

表1 タバココナジラミ成虫に対する各種薬剤の殺虫効果および登録内容一覧表

供試薬剤名	薬剤感受性検定結果および判定		希釈倍数	使用液量 (10a当たり)	使用時期	本剤の 使用回数	マルハナバチへの 影響日数の目安
	バイオタイプQ	バイオタイプB					
ニテンピラム	100 ○	93 ○	1000~2000倍	100~300L	収穫前日まで	3回以内	30日
ジノテフラン	100 ○	100 ○	2000~3000倍	100~300L	収穫前日まで	2回以内	14日
ネオニコチノイド系							
アセタミプリド	67 △	96 ○	2000倍	100~300L	収穫前日まで	3回以内	1日
イミダクロプリド	80 △	100 ○	2000倍	100~300L	収穫前日まで	2回以内	30日
合成ピレスロイド系							
エトフェンプロックス	47 ×	100 ○	1000倍		収穫前日まで	2回以内	30日
ピラゾール系							
ピリダベン	100 ○	100 ○	1000~1500倍	100~300L	収穫前日まで	2回以内	4日
スピロメシフェン	93 ○	60 △	4000倍	100~300L	収穫前日まで	2回以内	1日
ピリジンアゾメチン							
ピメトロジン	93 ○	100 ○	3000倍	100~300L	収穫前日まで	3回以内	0日
トルフェンピラド							
トルフェンピラド	60 △	100 ○	1000~2000倍	100~300L	収穫前日まで	2回以内	5日

注) 薬剤感受性検定方法：キャベツ葉を用いた簡易検定法（樋口, 2004）により実施
表中の数字は5日後の死虫率（%）

注) マルハナバチへの影響日数は目安であり、
薬剤の形態、濃度、散布量、気象、環境条件等によって日数に変化がある。

[その他]

研究課題名：コナジラミ類の薬剤感受性検定

タバココナジラミ類の減農薬防除体系の確立

研究期間：2009年度 農薬抵抗性検定事業（難防除害虫検定）

2008年度 農林水産業者等提案型共同研究

研究担当者：萩原駿介、水澤靖弥